

メトロポリタン史学会

第5回秋季シンポジウムのお知らせ

今年2009年はダーウィンの『種の起源』が刊行されてから150年にあたります。また、ダーウィンの生誕200年でもあります。メトロポリタン史学会では、これを記念して、秋季シンポジウム「ダーウィン・進化論と歴史学—『種の起源』刊行150周年によせて—」を企画しました。

ダーウィン『種の起源』が歴史学や社会諸科学に与えた影響は疑いもなく大きいものがあります。しかし、本来、生物学の分野における業績である『種の起源』が、なぜ人間とその社会にかんする研究分野にまで大きな影響を及ぼしたのでしょうか。本シンポジウムは、この点について、いくつかの角度から接近することを目的としています。会員のみなさんの参加をお待ちしております。

「ダーウィン・進化論と歴史学 —『種の起源』刊行150周年によせて—」

日 時 2009年11月28日(土) 午後1時～午後5時30分
会 場 首都大学東京(東京都立大学) 本部棟大会議室
京王相模原線 南大沢駅下車 徒歩5分

【報告】13:00～16:20

報告1. 小谷汪之氏(東京都立大学名誉教授)
「ダーウィンとマルクス・エンゲルス」

報告2. 橋本順光氏(大阪大学)
「黄禍論の歴史学—英国における東西人種闘争史観とその系譜—」

報告3. 吉澤誠一郎氏(東京大学)
「清末思想史における進化論受容の多様性」

報告4. 佐貫正和氏(総合研究大学院大学(院))
「日本における進化論の受容—丘浅次郎の進化論受容と変化を通じて—」

【全体討論】16:20～17:30

【懇親会】18:00～20:00

メトロポリタン史学会第五回総会・大会報告

昨年の4月18日（土）に、首都大学東京（東京都立大学）大会議室において、メトロポリタン史学会の第五回総会・大会が開催されました。参加者は総会14名・大会31名でした。

午前10時、小谷汪之氏を議長に選出して総会が始まり、2008年度活動報告、決算報告、監査報告、2009年度活動方針案・予算案・委員候補者が順次提案され、それぞれ採択されました（後掲議案書参照）。議論ではこれまでの活動を振り返りながら、研究活動や会誌・叢書発行等について活発な討論が行われ、具体的な提案もいくつか出されました。今後の活動に活かしたいと思います。

午後は、「時の支配と時間意識」をテーマにシンポジウムが開かれました。内容は以下の通りです。なお報告は会誌『メトロポリタン史学』第5号（2009年12月刊）に特集論文として掲載されましたので、ご覧下さい。

佐藤 正幸氏（山梨大学）

「なぜキリスト教紀年法は世界共通紀年法になることが出来たのか」

工藤 元男氏（早稲田大学）

「中国古代の「日書」にみえる時間と占ト」

医王 秀行氏（東京女学館大学）

「預言者ムハンマドとイスラム暦」

成田 龍一氏（日本女子大学）

「明治国家の時間/国民国家の時間/大日本帝国の時間」

メトロポリタン史学会第5回総会議案書(2009. 4. 18)

【メトロポリタン史学会 2008年度活動報告】

2008.4～2009.3

1. 会誌『メトロポリタン史学』第4号を2008年12月に刊行し、史学科のある大学を中心に約80機関に寄贈した。
2. 第4回書評会を実施した。
2008年6月28日 『歴史の中の移動とネットワーク』
書評者：伊川健二・徳橋 曜・近藤信彰氏、参加者13名。
3. 第4回秋季シンポジウム「歴史は誰のものなのか」を、2008年11月30日（日）に実施した。参加者22名
4. 第3回歴史探訪「東京の中のイスラム文化」を2008年10月12日（日）に実施した。参加者14名、講師：森山央朗氏
5. 第4回総会・大会を2008年4月19日（土）に開催し（参加者31名）、第5回総会・大会（2009年4月18日）の準備を行った。
6. 会報7号（2009. 3. 10）を発行した。
7. 会員数は現状維持にとどまり、拡大目標（180名）を達成できなかった。

[メトロポリタン史学会 2009年度活動方針案]

2009.4~2010.3

1. 会誌『メトロポリタン史学』第5号を2009年12月に刊行する。
2. 第5回秋のシンポジウムを2009年11月28日(土)に行う。
3. 第2回秋季シンポジウム報告集『いま社会主義とは何かー歴史からの眼差しー』と、第3回秋季シンポジウム報告集『地域世界論の新地平』を、それぞれ『メトロポリタン史学叢書』2、3として桜井書店から出版する。第4回秋季シンポジウム報告集『歴史は誰のものなのか』を『メトロポリタン史学叢書』4として刊行する(出版社未定)。
4. 第4回歴史探訪を10月もしくは11月に実施する。
5. 第6回総会・大会(2010年4月17日)の準備を行う。
6. 165名を目標に会員拡大に努め、会財政の確立を図る。

[メトロポリタン史学会 2009年度委員名簿]

任期: 2009.4~2011.3

会長: 佐々木隆爾

副会長: 峰岸純夫、増谷英樹、青木哲夫、小谷汪之

事務局: 木村 誠(事務局長)、谷口 央、赤羽目匡由

編集: 河原温(責任者)、奥村哲、佐々木真、澤田秀実、月脚達彦、福田千鶴、出穂雅実

企画・研究: 中野隆生(責任者)、小野昭、角田三佳、川合康、趙景達、橋谷弘、林田伸一、

監事: 義江明子、山田昌久

【事務局からのお知らせ】

●会費納入のお願い

今年も余すところ1ヶ月あまりとなりました。みなさんお元気でご活躍のことと存じます。恒例の会費納入のお願いです。

会費未納の方には、この会報と一緒に、振替用紙を同封させていただきました。また、未納額は封筒の宛名ラベルの下部に会費〇〇と記入しましたので、ご確認下さい。5とあるのは5,000円、10とあるのは10,000円のことです。ちなみに会費は一般5,000円、学生・院生3,000円ですが、部分的に未納がある方は半端な数字となっております。ご了解願います。多額の未納がある場合は、一年分だけでもお支払いいただければ幸いです。よろしく願います。

●来年度総会・大会予告

来年度の総会・大会を2010年4月17日(土)に開催します。大会シンポジウムのテーマは「20世紀の戦争」(仮)です。報告予定者は木畑洋一(イギリス近現代史)、小野寺拓也(ドイツ近現代史)、加藤陽子(日本近現代史)、山田朗(日本近現代史)の各氏です。詳細は後日お知らせいたしますが、予定表に書き入れておいて下さい。

メトロポリタン史学会 2008年度決算報告

2008.4~2009.3

[収入]

			2008 予算	2008 決算
前年度繰越金			331,194	331,194
会費			837,000	637,000
	2005 年度	(現金)	-	0
		(銀行)	-	0
		(郵便振替)	-	5,000
	2006 年度	(現金)	-	5,000
		(銀行)	-	0
		(郵便振替)	-	27,000
	2007 年度	(現金)	-	20,000
		(銀行)	-	0
		(郵便振替)	-	142,000
	2008 年度	(現金)	-	98,000
		(銀行)	-	5,000
		(郵便振替)	-	322,000
	2009 年度	(現金)	-	8,000
		(銀行)	-	0
		(郵便振替)	-	5,000
雑収入			0	4,455
	会誌売り上げ		-	0
	叢書売り上げ		-	4,320
	銀行口座利息		-	135
	大会懇親会費黒字		-	
計			1,168,194	972,649

[支出]

			2008 予算	2008 決算
会誌制作費			500,000	0
郵便料金			136,800	81,770
	会誌発送		46,800	0
	大会案内・会報等発送		80,000	67,600
	葉書		10,000	0
	切手			8,800
	その他		-	5,370
事務用品代			20,000	8,913
賃金・旅費			50,000	67,600

雑費			20,000	123,936
	振込手数料		-	420
	録音用メモリー・乾電池		-	108
	弁当・お茶・紙コップ		-	6,758
	懇親会赤字補填		-	22,150
	録音反訳料		-	94,500
予備費			441,394	0
次年度繰越金			-	690,430
	現金		-	43,225
	銀行		-	386,755
	郵便振替		-	260,450
計			1,168,194	972,649

●会員数 151名(一般 139名 学生・院生 12名)

●会費納入率 08年度・99/149=66.46% 07年度・121/148=81.8%

06年度・129/145=89.0% 05年度・138/143=96.5%

メトロポリタン史学会 2009年度予算

2009.4.1～2010.3.31

[収入]	1,409,430		
	前年度繰越金		690,430
	会費		719,000
	一般会員	5,000 × 120	600,000
	学生・院生	3,000 × 12	36,000
	未収分	5,000 × 16	83,000
		3,000 × 1	
	合計		1,409,430

* 予定会員数: 165名(一般 150, 学生・院生 15)

[支出]	1,409,430		
	会誌制作費		900,000
	郵便料金		175,800
	会誌郵送	330 × 260	85,800
	大会案内・会報等発送		80,000
	葉書・切手		10,000
	事務用品代		20,000
	賃金・旅費		50,000
	雑費		20,000
	予備費		243,630
	計		1,409,430

【歴史随想】

八丈島探訪記

谷口 央（首都大学東京、日本近世史）

今年の5月と9月の2回、私は八丈島民大学（首都大学東京共催）の講演とその準備のため、八丈島を訪れた。八丈島は北（北西）に八丈富士、南（南東）に三原山という二つの火山が合わさってできた、ひょうたん型の島である。距離的には、八丈町役場のホームページによると「東京の南方海上287kmに位置する」とあるように、東京都とは言え、私の住む南大沢近辺からは遠く離れた地である（南大沢も東京都の端っこではあるが・・・）。このように書くと、行くだけでも大変な印象を与えてしまいそうだが、実際は飛行機に乗れば羽田空港を飛び立って50分ほどで島の中心に位置する八丈島空港に到着できる。

以下、八丈島の史跡と、私が触れることができた島の歴史について記すことで、私の中での近くて遠い島、八丈島を紹介していくこととしたい。

八丈と流人、そしてその第1号の宇喜多秀家

八丈島が流人の島となったのは、江戸幕府の成立直後からである。そこでの流人の生活は、「渡世勝手次第」と言われるように自由刑であり、島内では自身の責任で生活するというものであった。ただ、島に到着したら、そこからすべて自由というわけではなく、島に着くと、まず流人の引受先がくじ引きで決められ、そこには9尺2間（6畳1間）の流人小屋があった。そこが島内での生活の始まりであった。

さて、どうしても流人が歴史の中心になってしまう八丈島であるが、流人第1号は、慶長11年(1606)に流された宇喜多秀家主従の、合わせて13人であった。

宇喜多秀家とは、豊臣秀吉の養子で、備中・備前・美作の3か国で50数万石を領有する岡山城(岡山県岡山市)の城主であった。また豊臣政権の晩年には、いわゆる「五大老」の一人として、前田利家・徳川家康などと政権運営の中心的な人物の一人でもあった。このように、豊臣政権の中枢を担う人物であったが、慶長5年(1600)9月15日に起こった関ヶ原の戦いで、徳川家康を大将とする東軍に敗れ、その結果、八丈島へ流罪となったのである。その後、秀家は明暦元年(1655)11月20日に病死するまで50年の間、八丈島で生活を送ったのであった。



宇喜多秀家の墓

八丈の史跡

私が八丈島へ到着して最初に向かったのは、八丈島空港近くであり、島の中心部に位置する、上にも書いた宇喜多秀家の居住地址である。しかし、現在は民家が建っているだけで、そのことを示す案内などもなく、残念ながら昔を偲ぶことはできなかった。その後、その近所にある秀家の墓を訪れた。秀家の墓は大賀郷の墓地の奥まったところであり、その墓石は上の写真にあるように、こけむした状態であった。ただ、この墓石は天保12年(1841)に改められたもので、それ以前からあったものとは異なるようである。

同じく大賀郷には旧陣屋跡が残されるが、そこでは石垣に注目させられた。八丈島は黒潮を越えた所に位置しており、内海しか知らない私にとっては、非常に荒々しいとの印象を受ける海に浮かぶ島である。その荒々しい海が作るのが、島内の石垣に多く使われる玉石である。要は、波によって石の角が削れた丸い石が

作られ、そして、その玉石を用いて作られた石垣が玉石垣なのである。この石垣は台風などにも強い作りで、まさに八丈島が生んだ歴史的財産の一つと言えよう。

続いて、八丈歴史民俗資料館へと向かった。八丈島の場合、遺される文献史料が江戸期を除くとほとんどなく、またその貴重な江戸期の文献史料も大半が東京都公文書館へ移管されているため、当資料館で文献史料を見ることはほとんどできない。しかし、島内で出土した磨製石器や島内の遺跡である湯浜遺跡の出土品など考古遺物のコーナーは、当時の生活の復元をめざした興味をひかれる展示であった。また江戸時代についても、漁業・農業・酒造にかかわる、実際に使用されていた諸道具や、島の歴史的特産品である「黄八丈」の作成に必要な機織り道具が展示されており、その実態を伺い知ることができる展示であった。なお、江戸時代の八丈島の特徴でもある流人については、遺される道具や遺物は多くはないが、流人の日常生活や、「島抜け」と呼ばれる島からの脱出をはかろうとした事件に至るまで、主に絵を用いるなどのビジュアル面も活用する中で説明が加えられており、全体を通して、一般の方にもわかりやすい島の歴史を知ることができる施設と言える。個人的には、幕末から明治期に製造されることになった「島酒」と呼ばれる八丈島独特の焼酎が製造されるに至るまでと、初期の製造方法が詳細に説明されていた点が、特に印象に残っている。それは一つには自身が酒好きであることは言うまでもないが、同時に、恒常的な食糧不足を乗り越えようとした当時の人々の知恵、そしてそれが現在まで脈々と続く歴史の一つであり文化となっていることを垣間見ることができたからである。

その後、島を南に進み檜立郷にある日蓮宗不受布施派の僧侶の墓を見学した。八丈流人の中で一番多かったのは武士身分であるが、次いで多いのが僧侶身分の者であり、これはその流人であった僧侶の墓である。墓石の作成年を確認すると、元禄期(1688～)から享保期(1716～)あたりに流されたであろうと考えられる者の墓が多いように思われた。江戸幕府がキリスト教を禁教していたことは有名であるが、仏教であっても日蓮宗不受布施派については禁教とされており、また 5 代綱吉の時期、すなわち元禄期に全国的に不受布施派寺院の禁止強化策を図っていることが、幕府の法令や同時期の各藩の藩法などにより知られる。私は、そのような事実を史料を通じて知っていたが、その僧侶のその後までは知らなかった。すなわち、ここに残される墓石は、どれも大型の石を用いた立派なものであり、流人として島に渡ってきた者とは言え、島民の対応は良かったであろうことが想像されるのである。

島の最南端に位置する中之郷では、元治元年(1864)11月に中之郷の藍ヶ江港に漂着・座礁した第二長崎丸で使用されていた VICTORIA 銘洋鐘がつり下げられている大御堂寺へ。ここでは、この鐘ではなく、寺の前にある石碑に注目させられることとなった。この石碑は、明和年間(1764～)に中之郷の 3 分 1 弱の者が餓死したことに対する弔いとして建てられた「餓死者冥福の碑」である。江戸期は何度か全国的にも飢饉があり、その都度多くの人々が命を落としたことが教科書などでも知られるが、島、特に八丈のような孤島の場合、陸続きの地域と比べて明らかに食料の継続的な確保、もしくは移入が困難であり、多くの食糧不足があったと想像される。この供養碑の存在から、その歴史的一断面を知らされることになった。



八丈島の歴史に学ぶ

最後に、空港の西の浜である大賀郷の南原千畳岩にある宇喜多秀家の像を見学した。この像は平成 9 年

(1997)に建造された新しいものであり、特に歴史的な史跡というわけではない。しかし、私は八丈島の方々と話をするうちに、この像は現在まで引き継がれてきた八丈島の歴史の一つと感じている。

私は、八丈島と最初に聞いたとき、「流人の島＝犯罪人の住んだ島」との思いが先立ち、真っ先に、そのことは地元の人にとって触れてはいけないことではないだろうかとの思いがあった。しかし、実際に八丈島を訪問して感じたことは、島民にとって、島外の人間が感じる様な意識は全くなく、むしろ流人こそが現在の我々の文化を創るきっかけとなったとの感覚が島内にあるのである。だからこそ、その流人第1号であった宇喜多秀家は、八丈島の人々にとっては、我が島の英雄であり、誇るべき人物なのである。秀家以降に流された流人についても、越後騒動により流された永見大蔵、『八丈実記』を記した近藤重蔵、島酒の元祖丹宗庄右衛門などはすべて島の誇る人物なのである。それは日蓮宗不受布施派の僧侶の整備された立派な墓からも感じ取れる。すなわち、私が最初に感じた「流人＝犯罪人」のような、いわゆる引け目のような感覚を、島内の人々は全く持ち合わせていないのである。現在販売している島酒の銘柄に「情け島」や「黄八丈」に並んで「島流し」という名があることから、そのことは十分に感じる事ができよう。

歴史を知ろうとするとき、我々は自身の価値観、もしくは現代の価値観を払拭し、史料が記された当時の感覚になろうと努力する。しかし、八丈島を訪れ、そして史跡を訪れることにより、上記に加え、史料が具体的に示す地域の実情や意識も付け加えないと、本当の意味での正確な歴史を知ることができないとの念に、私は改めて駆られることになった。その様な思いから、本来は村おこしの意味で作成されたというのが実態であろうと思われるが、島民の無意識の中にあるこの島の歴史に対する感覚が、この像を建造するに至ったのではなかろうかとの思いを抱かずにはいられないのである。

最後に、この像が夫妻で建造された背景についても少し触れてみたい。右の写真にあるように、宇喜多秀家の像は一人ではなく、その妻である豪姫も並べられている。豪姫は前田利家の娘で、八丈島へ流されていないため、直接には八丈島に縁のない人物である。また、秀家は八丈島では別の女性と事実上の婚姻関係にあったようで、八丈島にとっては、秀家一人の像だけで良いように思われる。しかし、豪姫の実家である前田家は、秀家だけでなく、八丈島に続いたその子孫に対しても継続的に援助を行っていた。また、赦免となった明治3年(1870)にも浮田(宇喜多の名を名乗る



ことを禁止されていたため改姓していた)一族を援助しており、浮田(宇喜多)氏にとっては切っても切れない存在と言える。そして、秀家と豪姫(前田家)をめぐる上記の話は、島内では多くの島民の間に、今も言い伝えられているのである。以上から、秀家が一人では寂しかろうとの思いに加え、秀家を縁とした現在まで続く八丈島の歴史を示すため、また時代を超えての秀家への援助＝秀家の人徳を偲ぶ事実を示すためにも、豪姫も並べて建てる必要があったのではないだろうか・・・少し想像が過ぎようか。

最後に、八丈島での遺跡めぐりでは、八丈島歴史民俗資料館解説員の伊藤宏氏にご案内いただき、またここまで記した島流しの実態、史跡については、伊藤氏が作成された「八丈島歴史民俗資料館作成資料」を参考にさせていただいた。末筆ながら、感謝の意を表して結びとしたい。

【第4回歴史探訪参加記】

軍艦三笠と猿島海軍要塞跡

渡辺和雄（都立大・21回卒）

秋晴れの爽やかな10月11日（日）12時50分、講師の野内秀明（横須賀市教育委員会）・山田昌久（首都大学東京）両氏をはじめ総勢約20名は、集合場所の京急「横須賀中央駅」東口を出発し、最初の目的地三笠公園に向かった。途中、今でも横文字看板の店が残る通称「ドブ板通り」や米軍基地ゲートなどを脇に見ながら、よく整備されたきれいな歩道を歩いて行った。

公園到着後、さっそく記念艦「三笠」の見学となったが、最初に佐々木隆爾先生（メトロポリタン史学会会長）による特別講義が甲板上で行われた。日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を壊滅させた日本海軍は、旗艦「三笠」以下最新鋭の戦艦4隻を擁し、ロシア海軍を凌駕していたこと。しかし、その優位性も、三笠を建造した当のイギリスが海戦の翌年、新モデルのドレッドノート型戦艦を建造したため、すぐに失われてしまったこと。又、「三笠」の保存には、スターリンの廃棄要求に対し、これを「キャバレー・トーゴー」に転用することで守ったマッカーサー元帥や、その著書の印税を保存資金として寄付してくれた米海軍提督ニミッツなど、多くのアメリカ人の助力もあったことなど、その内容はとても興味深いものであった。その後の自由見学では、各種の展示物で一杯の「三笠」艦内を時間いっぱい、精力的に歩き回った。

「三笠」見学後、14時40分発の船で沖合い1.7kmにある猿島に渡る。「猿島要塞見学」は、港近くの小さな発電所見学からはじまった。今回特別に見ることができたこの発電所は、設置以来ずっと島の重要な施設として稼働しているが、ここに元々あった島の神社は、設置にともない、対岸に引っ越してしまったとのこと。

続いて講師の方々の案内で島内の散策路を巡り、各ポイントでは懇切な説明をしていただいた。島には切り通しやトンネル、弾薬庫跡・砲座跡など、かつて要塞として使われた施設がたくさん残っており、どれも見ごたえのあるものばかりである。要塞には愛知県の旧武士達が焼いた高品質のレンガが多く使われており、その積み方にもフランス積とかオランダ積という違いがあることなど、あらためて知ることができた。要塞跡だけでなく、江戸時代のお台場跡や島の先端にある古代住居跡（日蓮洞窟）なども案内していただいた。



現在の猿島は横須賀市の管理のもと、散策路はよく整備されており、途中には撮影スポットになりそうな魅力的な場所も点在する。最終乗船時刻の17時までの短い時間ではあったが、遠い昔に思いを馳せながら、とても楽しい充実したひとときを味わう事ができた。下船後、再び駅まで歩き、17時30分頃解散となった。

